

Title	三浦周行著 国史上の社会問題
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.3 (1921. 3) ,p.463(153)- 464(154)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210301-0153">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210301-0153</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

故に本書は株券市價の決定に關する一般的要素論とも云ふべきものであつて、執筆に方り在來の類書に「囚はれる事を恐れて一切参照しなかつた」著者の識見と苦心の存するところは十分諒知することが出来る。然しなからそれと同時に從來この方面の研究が等閑に付せられたる所以は著者の云ふが如く「學者が其の研究の目的として取扱ふには頗る厄介千萬なものである」として忌避したるにのみ因るものでないことも承認せざるを得ない。

斯く云へばとてこれが爲めに本書はその價値を毫も失墜するものではない。何となれば本書は既に著者自ら述べたるが如く、嘗て本誌並びに國家學會雜誌々上に於て著者と渡邊鐵藏博士との間に行はれたる論争により、著者は「取引所相場の成立要素につき博士と少しく説を異にして居るを知つたので學問上の責任から本書を公にし、せられたものであつて要素論は本來その研究の核心を形成するものである。(尙、當時の著者の論文は附録第二として本書に収録せられて

ある)。然かしこれ等は各要素の結合程度、並びにその勢力程度は、明かに「その場合、場合によつて結合組合せの數及び具合が異なるのである」。たまた「更らにその場所と時とによつて各要素の勢力即ち影響の程度が異なるのである」。から「豫め説明する事が出来ぬものである」。従つて實際家がその著書によりて期待すべきことはその有する断片的知識の統一を求むることにある。加ふるにこの著書に對する著者の周到なる注意と不撓の研鑽の跡は、本文を通讀せざる者も雖も一度附録第一として収録せられたる、六號活字三十頁に亘る要素一覽表を瞥見したるものは容易にこれを窺知することを得るものと思ふ。

最後に評者はかゝ難問題に對し解釋の先鞭をつけたる著者の苦心と尙、研究を續けて「今後著書として公にしたき希望」を有せらるる著者の熱心に對して敬意を表して己まぬものである。(園乾治)

三浦周行著 「國史上の社會問題」

菊版三六四頁  
大盤閣發行  
定價三圓七十錢

本書は三浦博士が大阪の懷徳堂に於いて講演された手控に多少の修正を加へられたものである。現代社會問題を論ずる學者論客の多數が非歴史主義であることを憾みとして、それらの人々に「歴史的理解と共に、其論策、施設上、多少の暗示や刺激を與へ」ることが(はしがき)此の書の目的であるが、更に他方「從來の史家は餘りに政治や軍事に重きを置き」、(六頁)「社會の裏面や下層に流れて居る暗流が、段々漲つて來るにつれて、是迄表面勢力のあつた上層のものも、いつしかそれに推し流されて漸次下層に入れ替はる」(七頁)歴史事實の真相を閑却して居ることに對して、新しく裏面に潛む社會問題を明かにしやうと云ふのも一つの目的であるらしい。併し「もとより現代の社會問題に結び附け

やうとするものでも何んでもないのであつて、何處までも過去の歴史に現れた問題を、事實有りのままに説いて、専門の研究的立場から批判して行かうといふに過ぎぬ」(一〇頁)

次に本書の内容を示すと上古の社會問題として姓氏問題、貧富問題を、中古の社會問題として土地分配の問題、貧富衝突の問題を論じ、鎌倉時代の社會問題、室町時代の社會問題、豊臣時代の社會問題を概観し、江戸時代の社會問題として社會階級の確立、浪人の取締、無宿の救済、社會運動、町人の向上等を擧げて居る。併し前にも述べた通り本書は元來が講演であるが爲めにか、中古の社會問題が第四講から第十講まで八講を費して居るにも拘らず、他の四時代に僅か五講、殊に江戸時代の如き最も多くの重要な社會問題の發生せる時代を二講に足らない紙數を以つてしたのは、甚だ失當であり遺憾であると思ふ。

併し本書が大體に於いて國史に現れた其の時代々々の社會問題を概観する點に就いては成功

したもの云へやう。假令尙ほ古代に於ける下層平民階級の史料并びに其の論述に關して、多少表面的過ぎる不満があり、一般に亘つて餘りに概括過ぎ、靴を隔て、痒を搔くの感がなくはないが、余は其の大體を知る上に於いて好著であると信ずる。少くとも本書に示されたる種々なる過去の社會問題だけに就いて、吾人は一層詳しく歴史的研究を必要とする。而して「社會民心に直接影響のある本問題の如きは、徒らに事情を異にした西洋の直譯や純理に走るよりも、是等の歴史的事實を顧慮し、參酌して、機宜に適する處置を取つた方が、其實効を擧ぐる上に一層望ましいことであらう。」(三六三頁)唯現在の社會問題と同等過去に於ける社會問題との本質上の差違に就いては多少考慮を費す必要があらう。(野村兼太郎)

堀江博士著 社會經濟研究

東京國文堂發行  
定價金貳圓八拾錢

本書は堀江博士の前著「經濟組織改造論」の續巻とも見るべきものにして、大正九年一月頃より、同十月に至る間著者が本誌を始め都下の諸雜誌に寄稿せる論文中の「或るもの」を収録し併せ加ふるに東京日々新聞に續載せられたる「恐慌當時の關東機業地」視察記を以てしたり。通篇「恐慌不景氣並に經濟的的反動」、「勞働並に社會問題」及び「政治と經濟との交渉點」の三篇、二十六章、自由放任、自由競争主義を以て「昔の夢」となす著者が、その新立脚地よりして時事に對して下せる痛烈なる論評文最も多きを占めたり。

堀江博士の前著が逸して本書が新たに獲たる論評の題目は恐慌及び不景氣の襲來にして之を題材とする文は十二章の多きを數ふ。今是に對する博士の意見を窺はんには經濟社會に反動が招致せられたる根本の原因は世界戰爭の終結に基づく(一)外國貿易の逆勢(二)正貨の減縮(三)金融の緊縮(四)物價下落の大勢(四一頁其他)是なる事を認むと雖も、此間に處して「私黨の利益

を謀るの外に何等の經綸なく(八八)「間違ひだらけの經濟政策を施す」(六二)。現内閣が「放漫極まる財政政策を濫行し、不謹慎なる金融政策を盲斷」(七〇)したる爲め反動の勢を激成したる罪甚だ重しとなすものなり。茲に起る根本問題は恐慌は果して人力を以て能く之を避くる事を得るや否や是なり。博士謂らく恐慌の經濟社會に於けるは猶ほ疾病の人體に於けるが如く、人智の進歩に由て「病氣其もの、避けられるが如くに恐慌も亦之を回避するを得るのである。唯經濟社會に於て商工業の局面に當つて居る者の行動をして其赴く所の自由に任せて置いたならば、恐慌は到底回避するを得ない」と云はなければならぬ」と(三六)。然らば此の「何等の規律なき生産、利己の欲求のみに驅られて居る生産」に代るべきものは何ぞ。博士答へて曰く、「國家が經濟生活の中心と爲つて、生産に對し、資本の運用に對して、共に或る統制を加へたならば、生産過剰や資本の固定から恐慌の惹起される弊害は餘程除き去られるものと認めなければ

ならぬ」と(三七)。茲に國家が經濟生活の中心となり、生産及び資本の運用に對して或る統制を加ふと謂ふは果して如何なる程度の事を意味するや。之に對する解答は寧ろ之を第二第三兩篇に求む可きもの、如し。博士が單純なる産業の國有市有に満足せざる事は三五頁以下の數節明に其證左を提示す。蓋し殊に我邦の事實に徴して單純なる國有私有の利小にして弊大なるは、その國有市有を行ふも、未だ産業の社會有(Socialization)行はれざるを以てなり(三六六)。然らば此社會化を行ふの方法は如何。博士は之に答へて、「其内の重なるものとしては第一普通選舉に依て、政府と人民とを舉げて同一體のものとする事、第二事業に従事する勞働者に對しては、其精神勞働者であること、肉體勞働者であることを問はず、總て一ツの團體を組織させ、此團體に於て、産業を管理する權利を持つこと、第三消費者も亦進んで團體を組織して、事業の經營に干與し、斯くて從來閑却されて居つた消費者全體の利益を擁護」するが如きは最も必要